第Ⅲ章 調査の記録

第1節 第I期(Xb~XI層)の調査(第7図~16図)

第 I 期は、姶良Tn火山灰層下位のX層下部 3 分の 1 を占める第 X b 層から第 XI層上部数cm以内に遺物が分布し、調査区北端部に集中区がある。なお、石器石材の特徴は、第 2 表に記載している。

第X層黒褐色土(10YR2/2)は、硬質でブロック状に割れ、径 $1\sim5$ cm程の円礫を含んでいる。層厚が約40cmと大変厚く、便宜的に上部2/3をX a、下部1/3をX b 層として記録した。またこの層はかなり固く、掘削していく作業員の負担も大きかったため、各グリッドに L 字型のトレンチを設定し、これらの中を第XI層まで掘削していった。トレンチ内に剥片等がまとまって確認されれば、トレンチ外周辺まで範囲を広げるという方法で調査を行っていった。最終的には、第XI層上部までの掘り下げを行った箇所は、調査区全体の約半分(第7図)におよんだ。

(1)出土石器(第8図~9図-1~9)

第 I 期の石器は、調査区北部の K-4 グリッド付近を中心に出土し、合計83点を確認した。その内訳は、礫器 2 点、微細剥離ある剥片 1 点、剥片・砕片71点、石核 6 点、敲石 2 点、台石 1 点である。石材は、流紋岩 (特に R IV類)、ホルンフェルスを中心としている。

1・2は、大形の偏平な円礫を同一方向から数回打撃を加え刃部を形成する片面礫器である。1はho製、2は凝灰岩製である。これらは石核とも考えられる。しかし、礫器と認定したのは、刃部が60度以下の鋭角なもので、本遺跡の他時期石器に比べ、第 I 期は、総出土石器数に対し、剥片石器の割合が少なく(第1表)、礫器製作を目的としたものと考えられるからである。

3は、不定形の剥片で表面に自然面を残し、右側縁に微細剥離がある。R I 類製である。

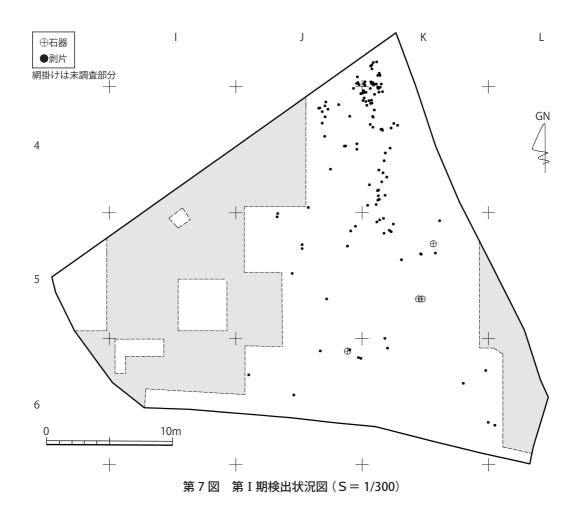
 $4 \sim 7$ は剥片である。4 は縦長な剥片で上端に作業面調整がある。R I 類製である。 $5 \cdot 6$ は横長な剥片で、5 は R II 類、6 は R II 類製である。7 は不定型な剥片で R IV 類製である。

8は敲石で端部に敲打痕がある。砂岩製である。

9は台石で、砂岩製である。

		流紋岩			ホルン フェルス	チャート	砂岩	凝灰岩	花崗斑岩	黒曜石	合 計	
			Ⅱ類	Ⅲ類	IV類	フェルス	, , ,	P 41	12/2/2/21	10144947	W.E []	п н
礫	器	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	2
微細剥離ある剥片		1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
剥片・	砕 片	16	7	4	23	21	0	0	0	0	0	71
石	核	1	0	1	1	3	0	0	0	0	0	6
敲	石	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
台	石	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
合	計	18	7	5	24	25	0	3	1	0	0	83

第1表 第I期出土器石材別組成表

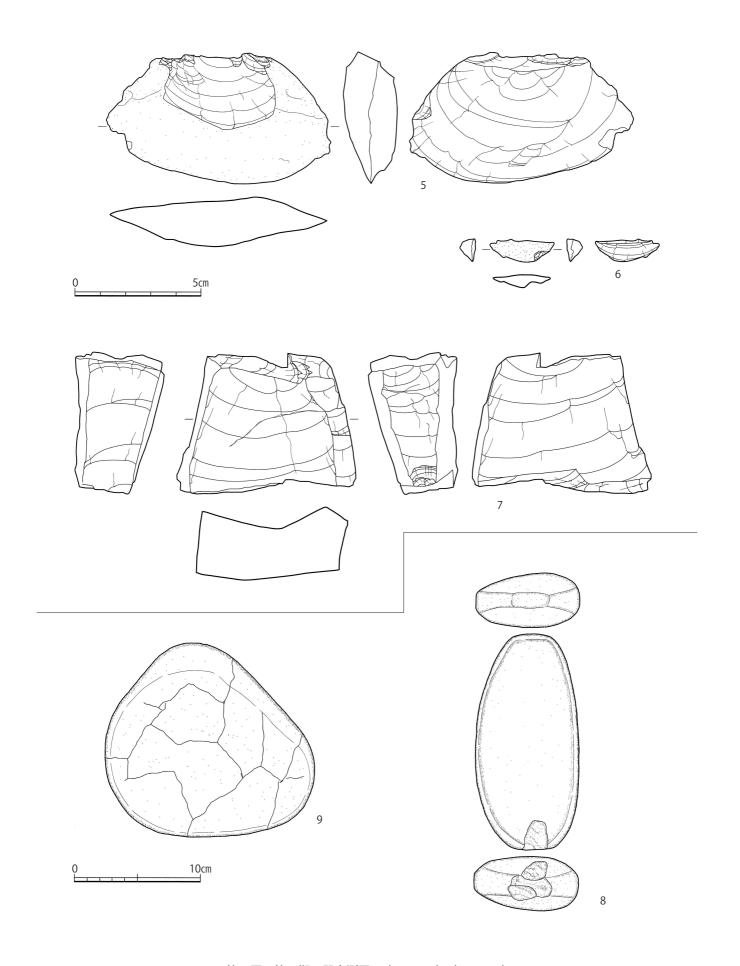


石 材 名	特 徵
流紋岩Ⅰ類	略号「RI」。灰白色〜灰黄色系の一群である。雲状、縞状の模様を含むものが多い。表面がやや粗く風化の進んでいるものもある。
流 紋 岩 Ⅱ 類	略号「RII」。灰色〜暗灰色系の一群である。雲状、縞状の模様を含むものが多い。暗灰色系の ものは、光沢がある。
流紋岩Ⅲ類	略号「RIII」。黒色系の一群である。
流紋岩Ⅳ類	略号「RIV」。暗赤褐色系の一群である。鉄分沈着の認められるものが多く、雲状、縞状の模様を含むものが多い。
ホルンフェルス	略号「ho」。暗灰色~黒灰色系の一群である。
チャート	青灰色系の剥片等とオリーブ灰色系の台石・敲石がある。
砂岩	細粒なものも含め「砂岩」としてまとめる。
凝 灰 岩	礫群の構成礫などに用いられることが多い。
花 崗 斑 岩	礫群の構成礫などに用いられることが多い。
黒 曜 石	黒色系の剥片が出土している。

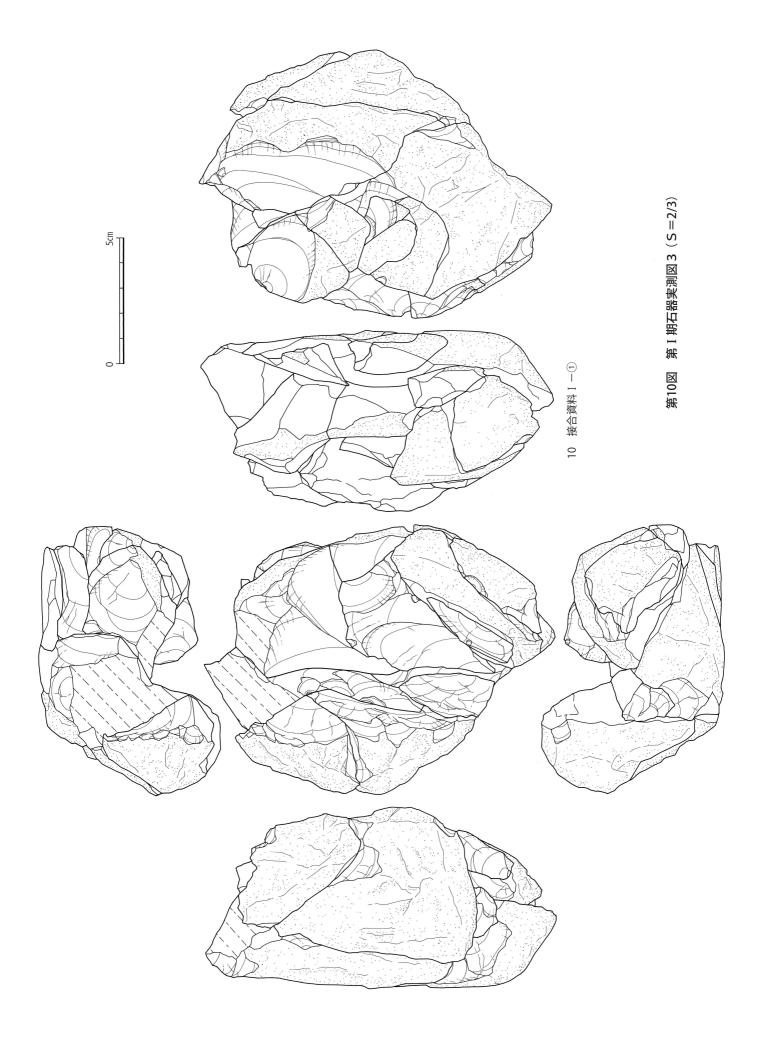
第2表 主要石器石材分類表

第8図 第1期石器実測図1(S=2/3)

- 12 -



第9図 第I期石器実測図2(S=2/3)、(S=1/3)

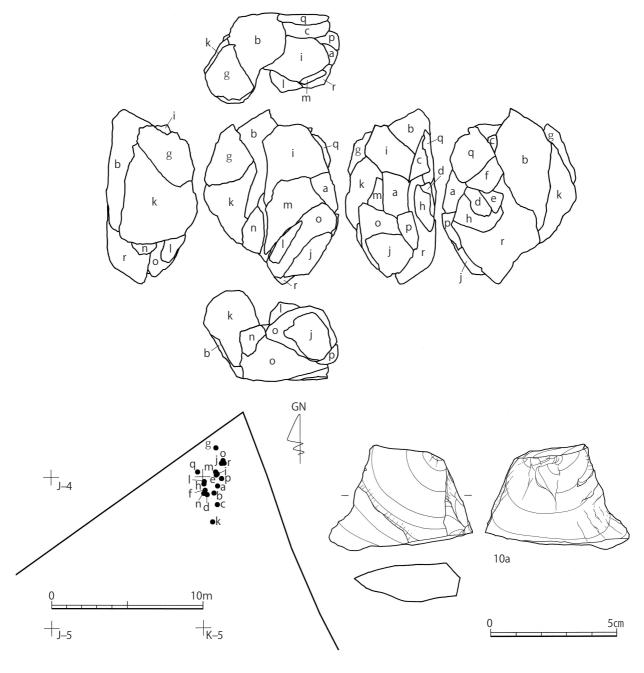


(2)接合資料(第10図~16図)

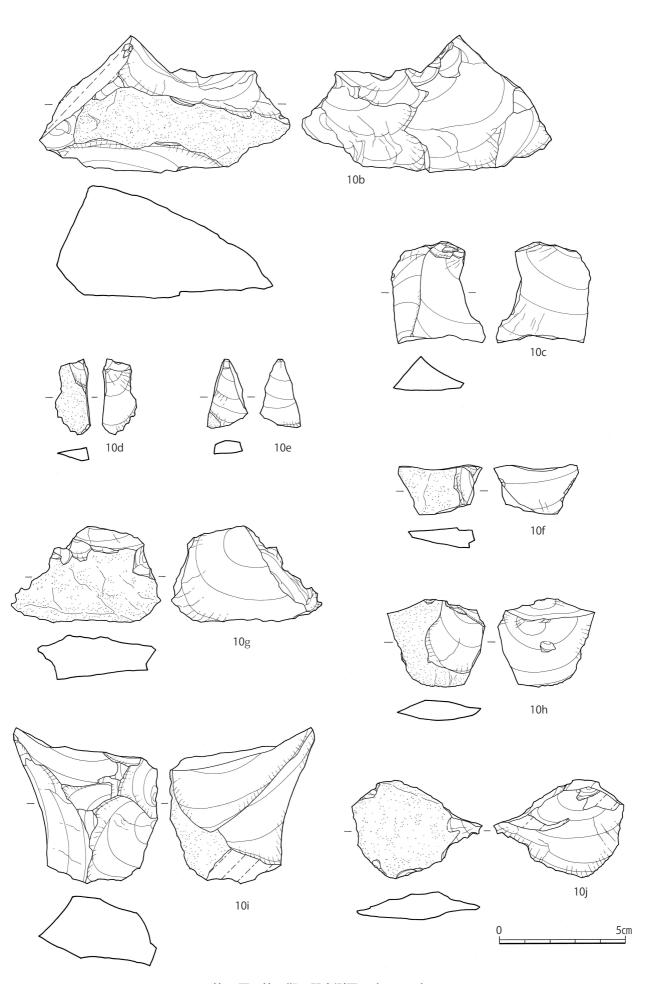
接合資料は10例確認された。そのうち4例の図化を行った。

[接合資料10] (第11・12・13図)

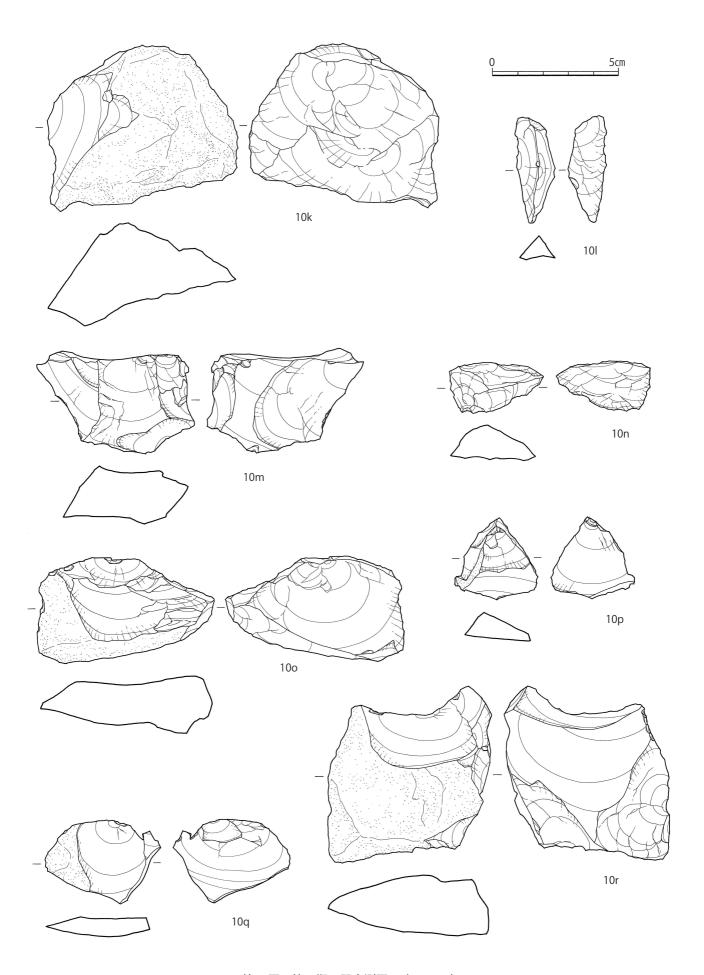
10接合資料 I-①は、R IV類製で剥片 18点が接合している。いずれも調査区北端部、K-4 グリッド付近に集中して出土した。素材は長径約14cm、短径約11cm程度の亜円礫である。正面中央部を大きく打ち欠き、二分割した後、それぞれに形成された分割面を打面とし、大型の剥片を作出している。その後、頻繁に打面を転移させながら剥離を行っており、得られた剥片は厚みがあり、自然面が見られる不定形のものが多い。10a+10i、10d+10e、10q+10fは、それぞれ 1 枚の剥片であり、剥片剥離の衝撃で節理により偶発的に割れたものである。



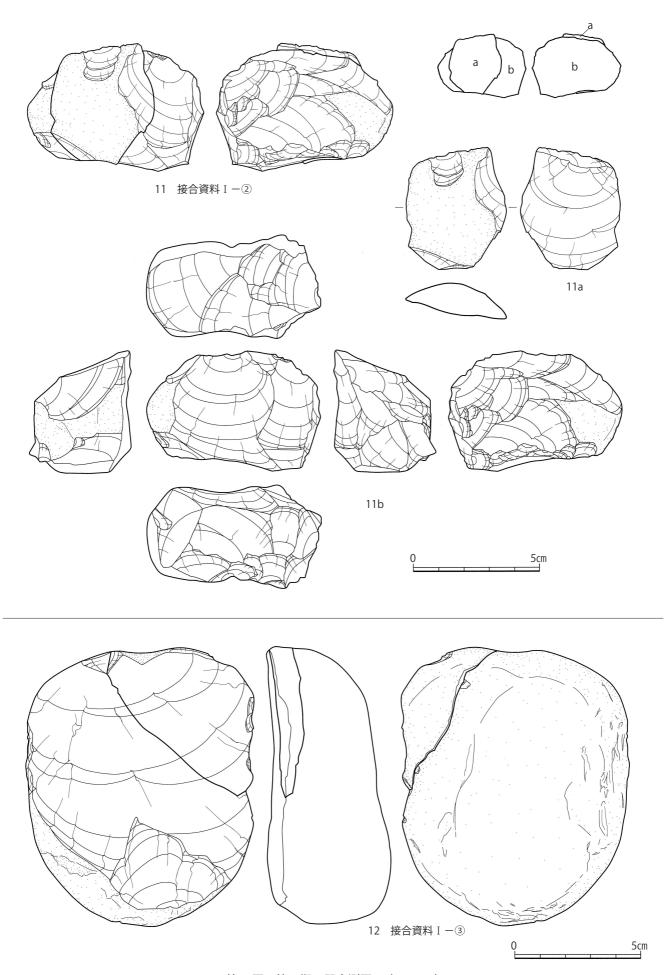
第11図 第 I 期石器実測図4 (S=2/3)接合資料 I - ①分布図 (S=1/250)



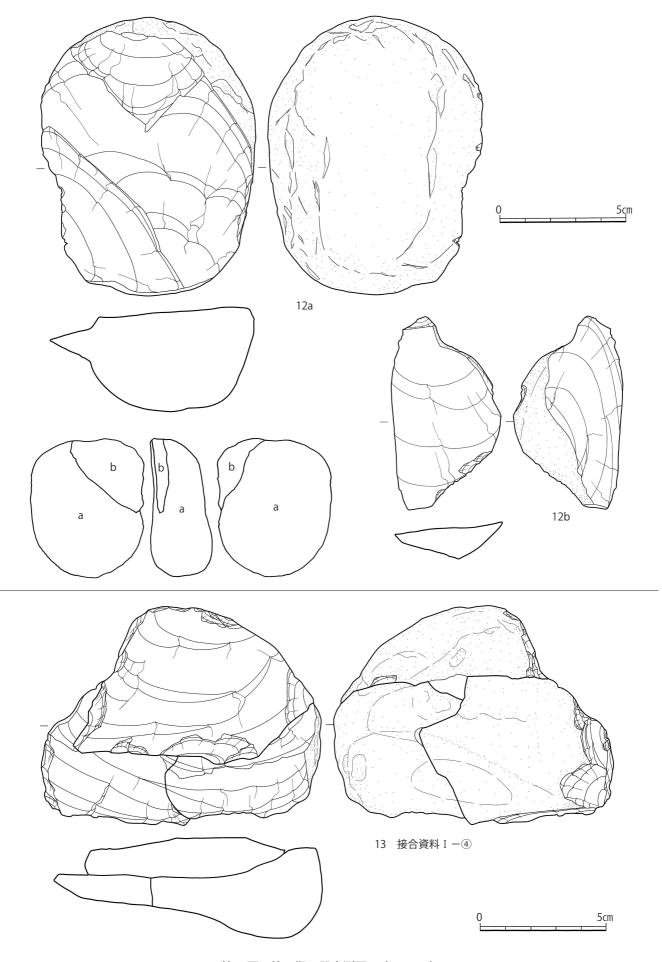
第12図 第 I 期石器実測図 5 (S=2/3)



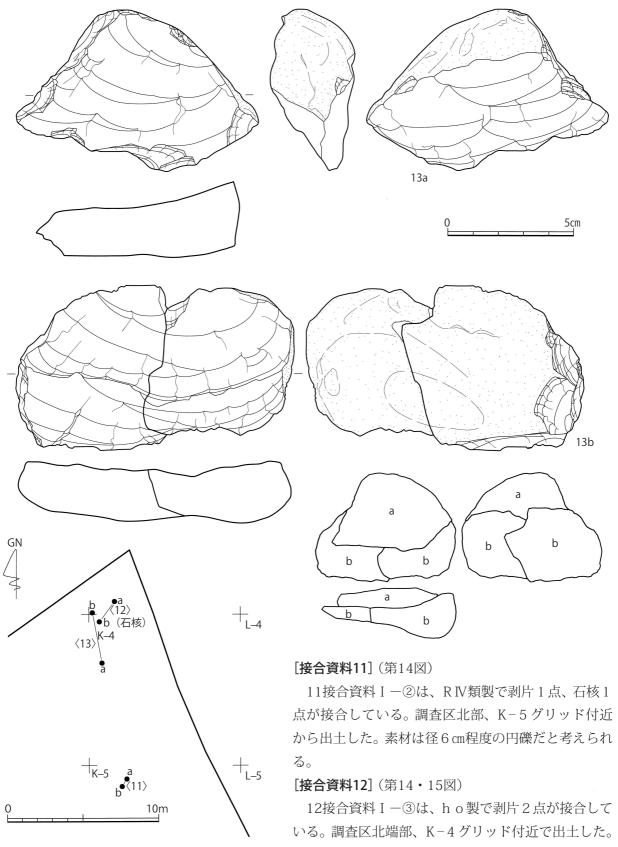
第13図 第 I 期石器実測図 6 (S=2/3)



第14図 第 I 期石器実測図 7 (S=2/3)



第15図 第 I 期石器実測図8(S=2/3)



拳大の楕円な亜円礫を二分割し、自然面からの打撃で12bの剥片を作出している。

[接合資料13] (第15・16図)

13接合資料 I - ④は、h o 類製で剥片 2 点が接合している。調査区北端部、K-4 グリッド付近で出土した。素材は拳大の亜円礫だと考えられる。裏面中央部から剥片を作出している。

第16図 第 I 期石器実測図9 (S=2/3) 接合資料 I -2・3・4分布図 (S=1/250)

第2節 第II期 (Xa層)の調査 (第17図~38図)

第Ⅱ期は、姶良Tn火山灰層直下からX層上部の厚さ10~20cmに遺構・遺物が分布している。遺構は、 礫群2基でいずれも調査区南東側で検出した。調査区北端部、南側、南東側の3箇所に遺物の集中区が ある。

(1) 礫群(第18図)

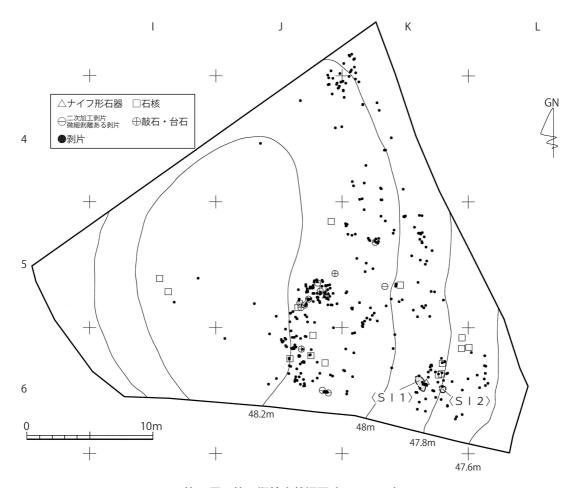
礫群 2 基はどちらも K-6 グリッド南東側で検出した。検出面は、1 号礫群 (SI1) は X層上部で、2 号礫群 (SI2) は X層中部であった。

1号礫群(SI1)は、礫が6個使用されており総重量は4.75kgである。いずれも砂岩で、赤化は弱かった。流されて散漫な密度で礫群とは認定しがたい面もあるが、中央に巨礫があった。炭化物や掘込は確認できなかった。

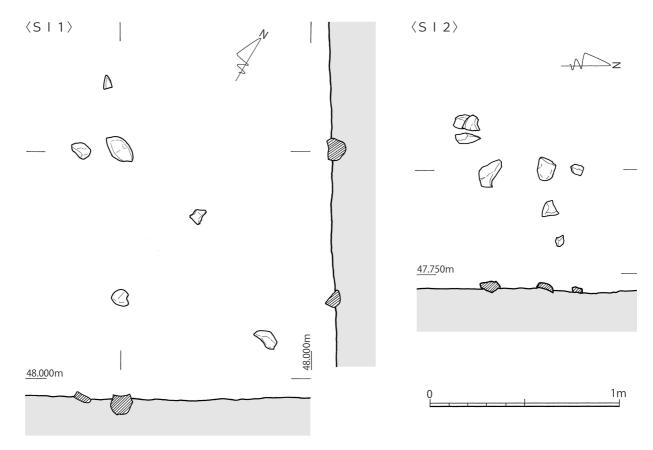
2号礫群(SI2)は、礫が8個使用されており総重量は2.05kgである。中央の巨礫は花崗斑岩で、その他は砂岩の角礫であった。赤化は弱く、炭化物や掘込は確認できなかった。

(2) 出土石器 (第19~38図-14~28)

第Ⅱ期の石器は、調査区北部の K-4 グリッド付近、K-6 グリッド付近、K-6 グリッド南東側の3つの集中区から主に出土し、合計355点を確認した。その内訳は、ナイフ形石器 2 点、二次加工剥片 1 点、微細剥離ある剥片10点、剥片・砕片323点、抉入石器 1 点、石核16点、敲石 1 点、台石 1 点である。流紋



第17図 第Ⅲ期検出状況図(S=1/300)



第18図 第Ⅲ期礫群実測図(S=1/20)

岩(特にRⅡ類)を中心としている。

14・15はナイフ形石器である。どちらも二側縁加工で、14は縦長な剥片、15は横長な剥片を素材としている。RⅢ類製である。

16は、二次加工剥片で作業面調整があり、縦長な剥片を素材としたRⅡ類製である。

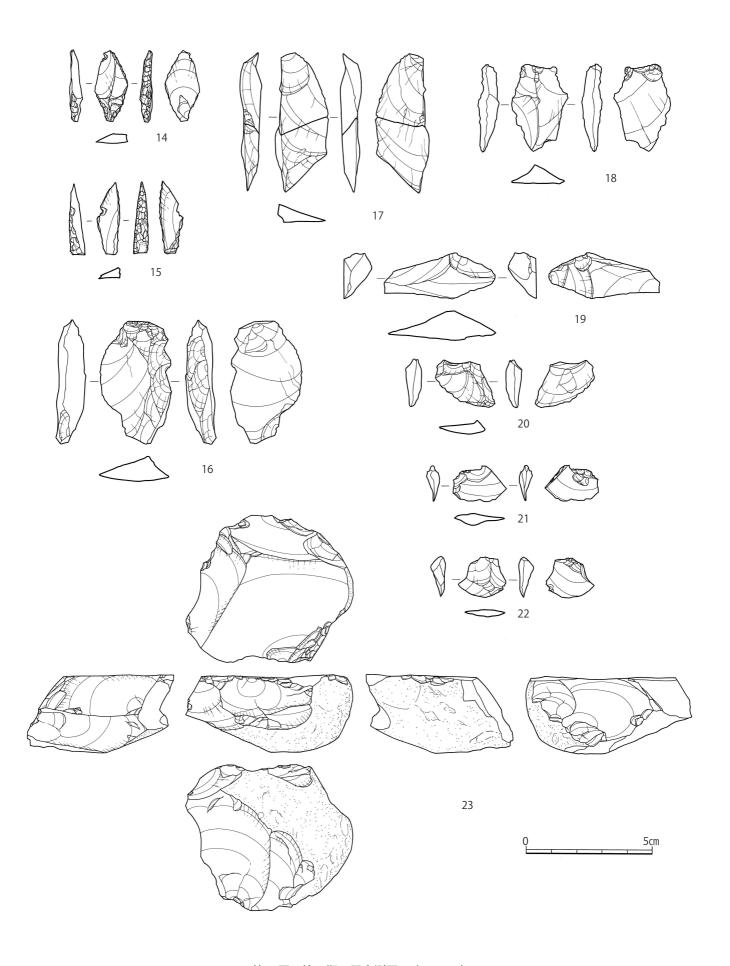
 $17 \sim 22$ は剥片である。 $17 \cdot 18$ は縦長な剥片、19は横長な剥片で R I 類製である。20は不定形剥片で R II 類製である。 $21 \cdot 22$ は、チャート製の不定形剥片で、作業面調整がある。

 $23 \sim 26$ は石核である。 $23 \cdot 24$ どちらも縦長や不定形剥片を作出している。R II 類製である。 $25 \cdot 26$ はチャート製で、連続して剥片を作出している。

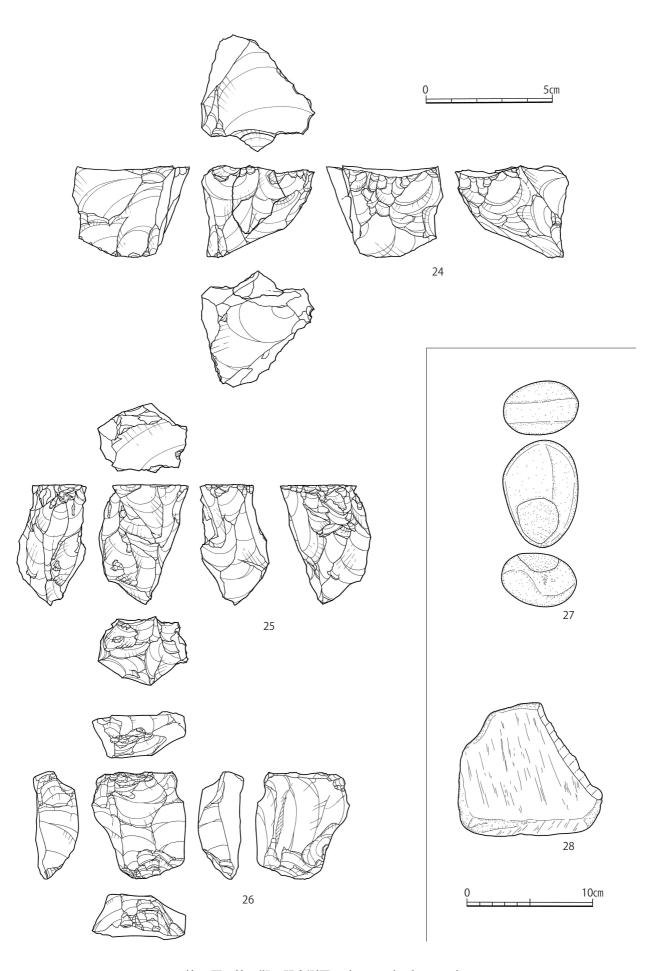
27は砂岩製の敲石、28は凝灰岩製の台石である。

		流	文 岩		ホルン	チャート	砂岩	凝灰岩	花崗斑岩	黒曜石	合 計
	I類	Ⅱ類	Ⅲ類	IV類	フェルス	77-1					合 計
ナイフ形石器	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
二次加工剥片	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
微細剥離ある剥片	1	9	0	0	0	0	0	0	0	0	10
剥片·砕片	98	159	47	5	5	6	3	0	0	0	323
抉 入 石 器	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
石核	2	11	0	0	1	2	0	0	0	0	16
敲 石	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
台 石	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
合 計	101	181	49	5	6	8	4	1	0	0	355

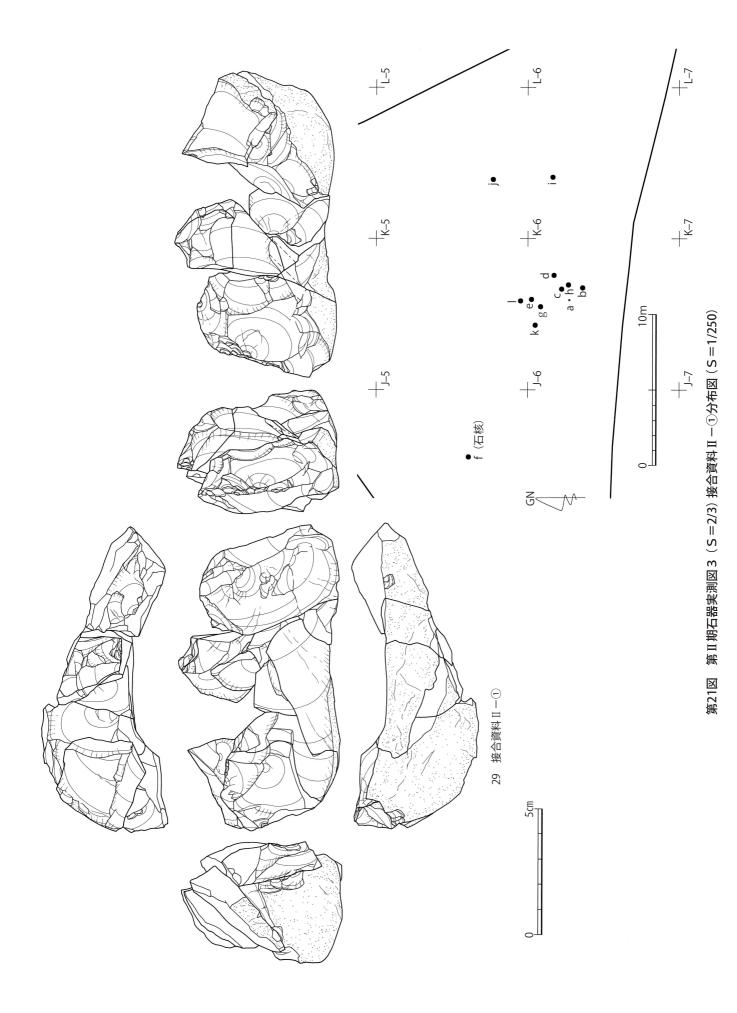
第3表 第Ⅲ期出土石器石材組成表



第19図 第Ⅲ期石器実測図1(S=2/3)



第20図 第 II 期石器実測図 2 (S=2/3)、(S=1/3)



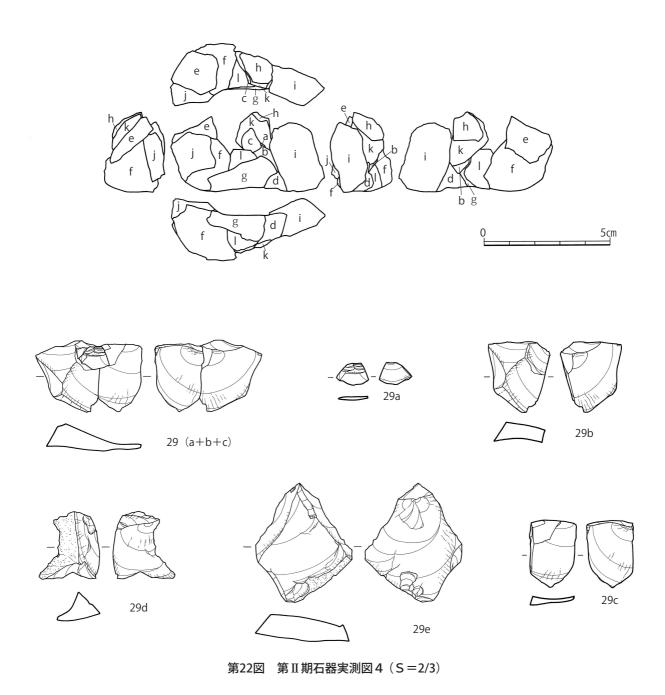
- 25 -

(3)接合資料(第21図~38図)

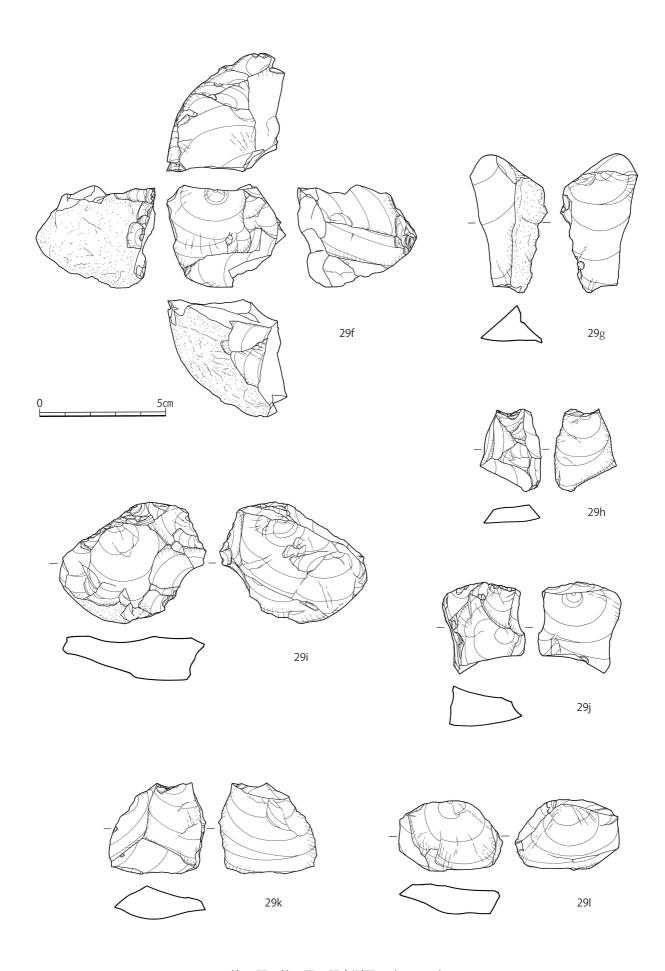
接合資料は32例確認された。そのうち11例の図化を行った。

[接合資料29] (第21・22・23図)

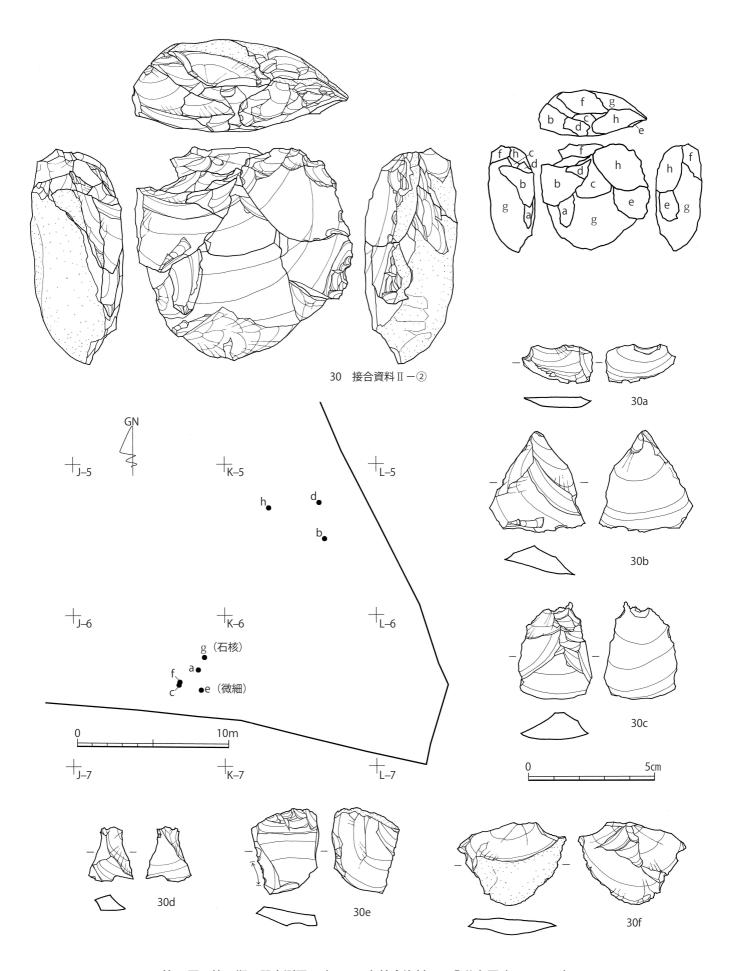
29接合資料 II-①は、R I 類製で剥片11点、石核1点の合計12点が接合している。いずれも調査区南東部、J-6 グリッド付近に集中して出土した。素材は長径約12cm、短径約6cm程度の楕円礫であったと考えられる。礫面部はほとんど全て残存しており接合するが、素材内部は空間となっている。正面右側の29iなど礫端部を打ち欠き打面を形成し、29a、29b、29c、29d、29h、29kを縦方向に剥離している。29iには作業面調整が見られる。また29fを中心に、29g、29l、29e、29jを剥離している。どれも分厚い剥片である。29jには作業面調整が見られる。29fは、石核である。石核の29f や作業面調整の見られる29i、29jは、他の9点が出土した集中箇所から5mほど離れた場所で出土している。



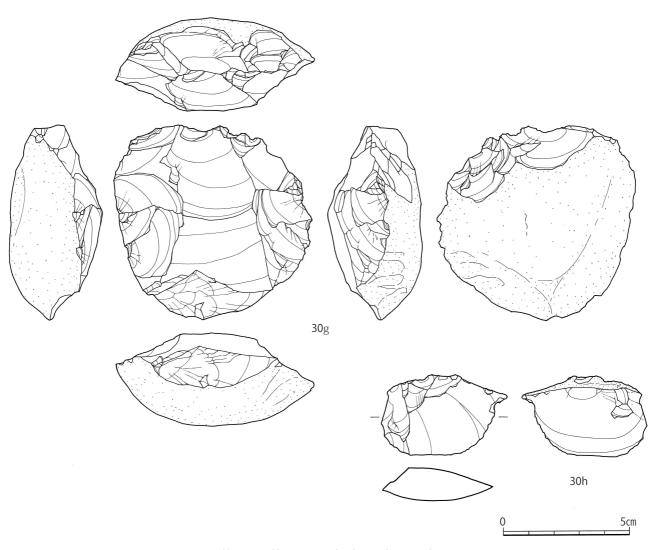
- 26 -



第23図 第Ⅲ期石器実測図5(S=2/3)



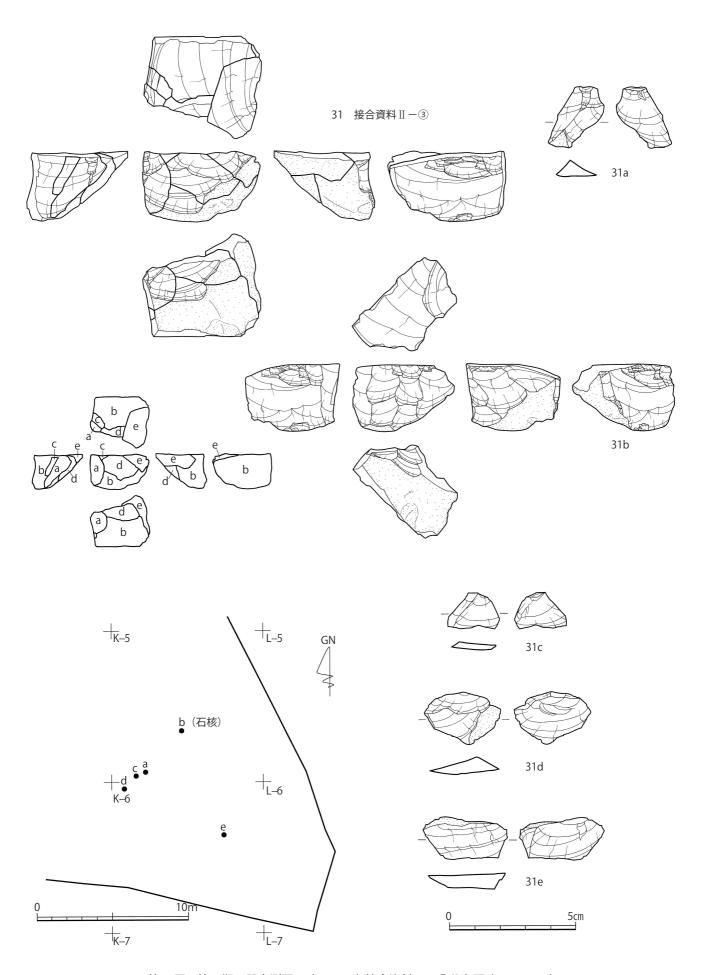
第24図 第Ⅲ期石器実測図6(S=2/3)接合資料Ⅲ-②分布図(S=1/250)



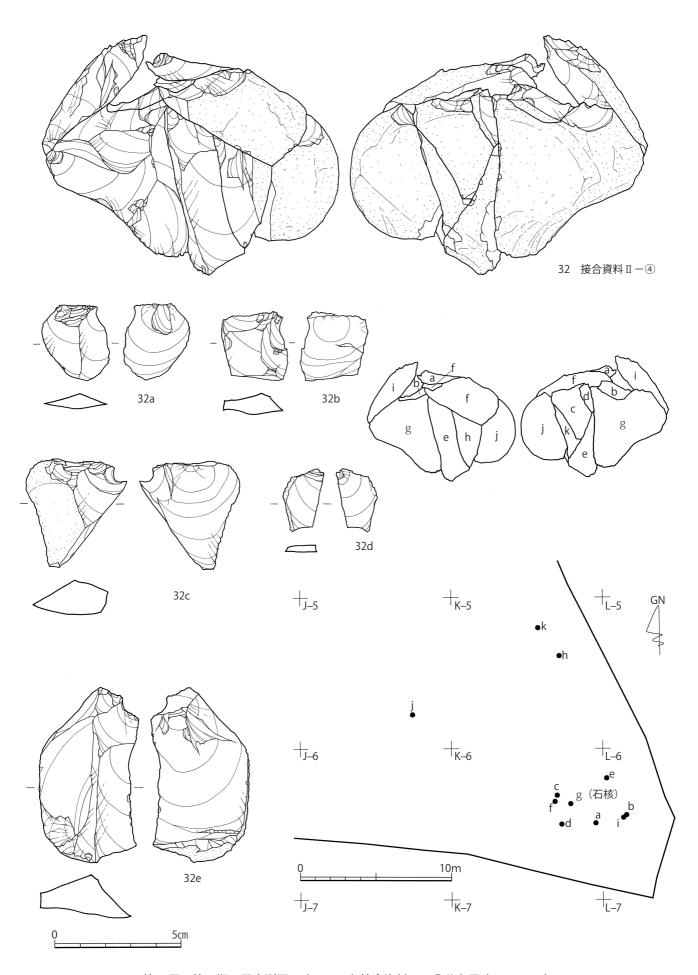
第25図 第Ⅲ期石器実測図7(S=2/3)

[接合資料30] (第24・25図)

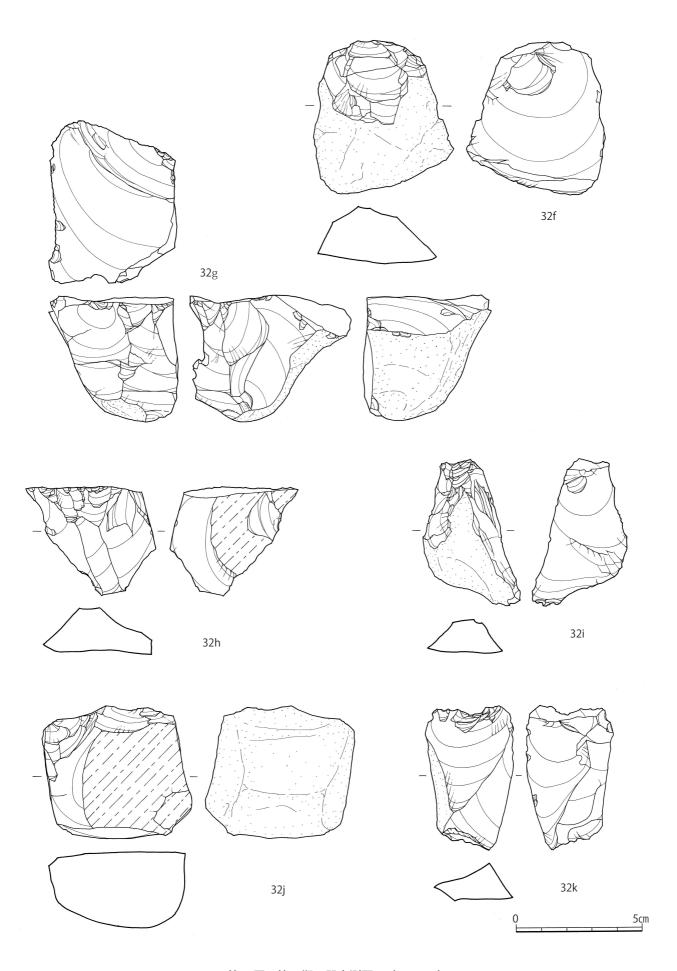
[接合資料31] (第26図)



第26図 第 II 期石器実測図 8 (S=2/3) 接合資料 II-3分布図 (S=1/250)



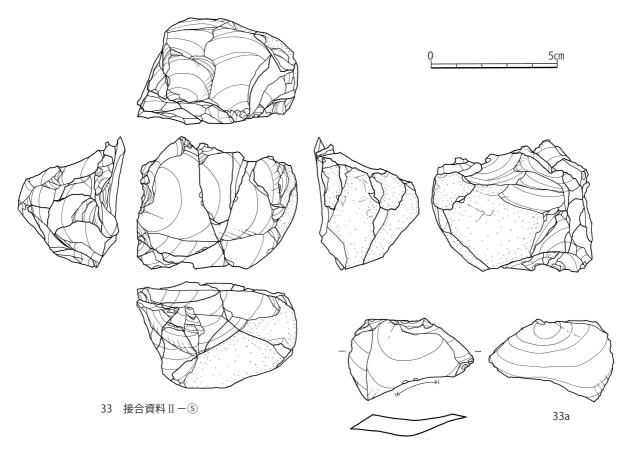
第27図 第 II 期石器実測図 9(S=2/3)接合資料 II -4分布図(S=1/250)



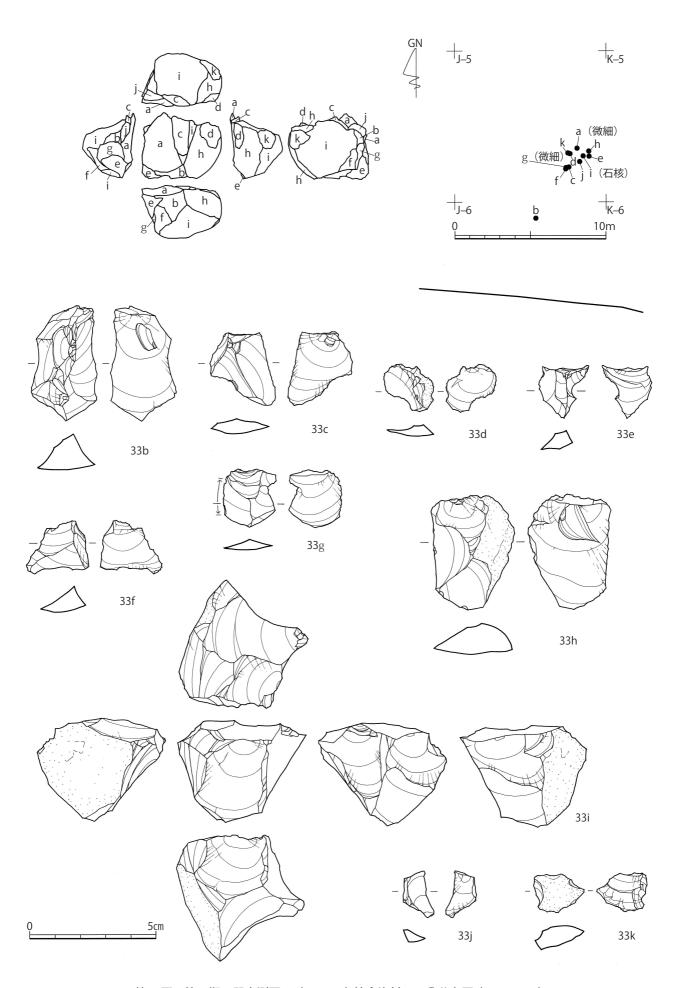
第28図 第 II 期石器実測図10 (S=2/3)

[接合資料32](第27·28図)

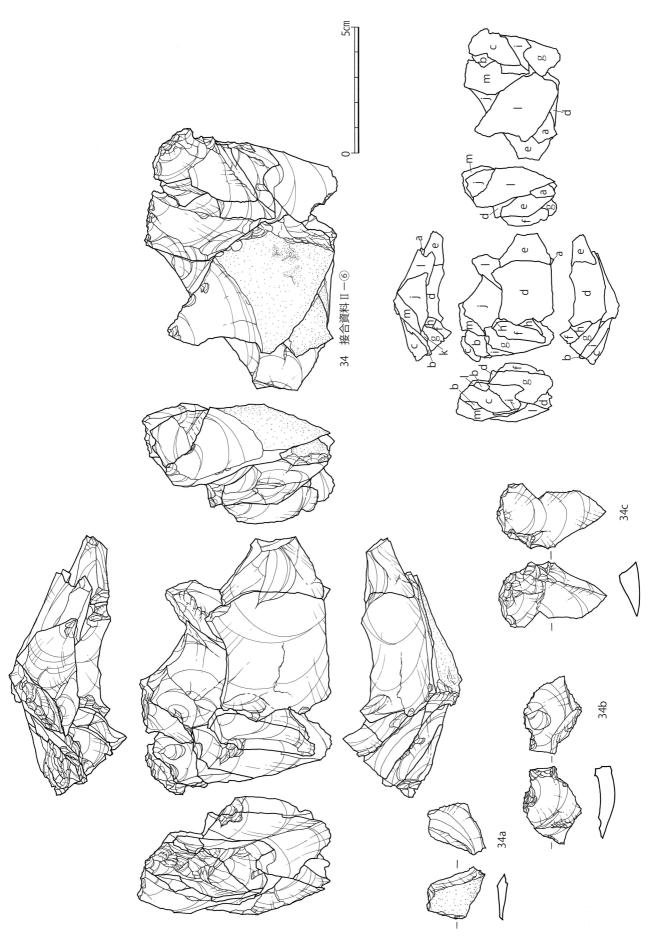
[接合資料33] (第29・30図)

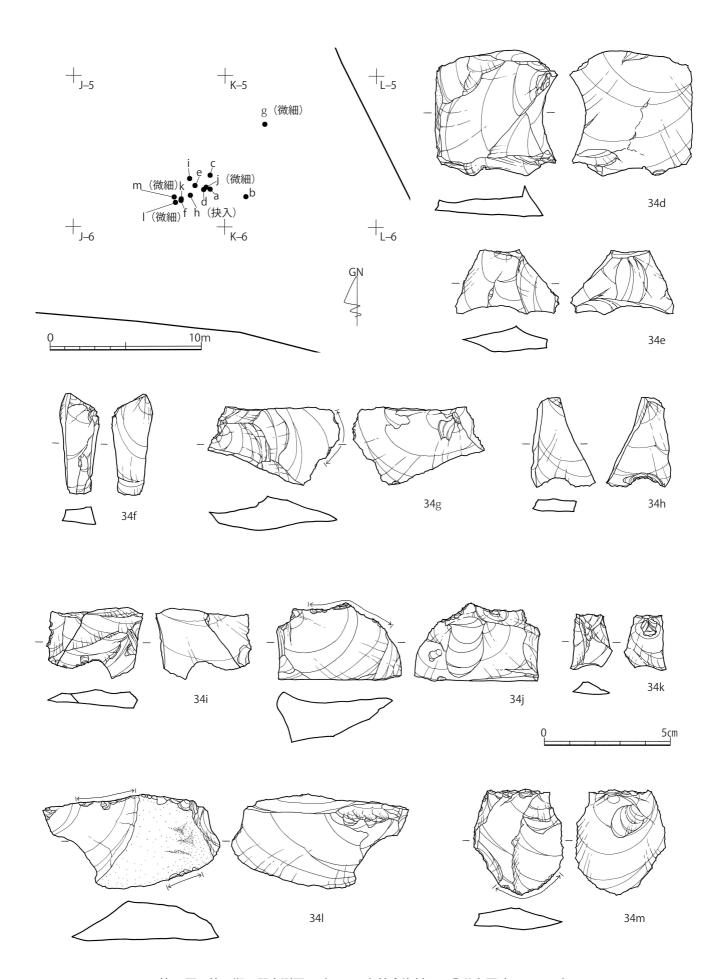


第29図 第Ⅲ期石器実測図11(S=2/3)



第30図 第 II 期石器実測図12 (S=2/3) 接合資料 II - ⑤分布図 (S=1/250)



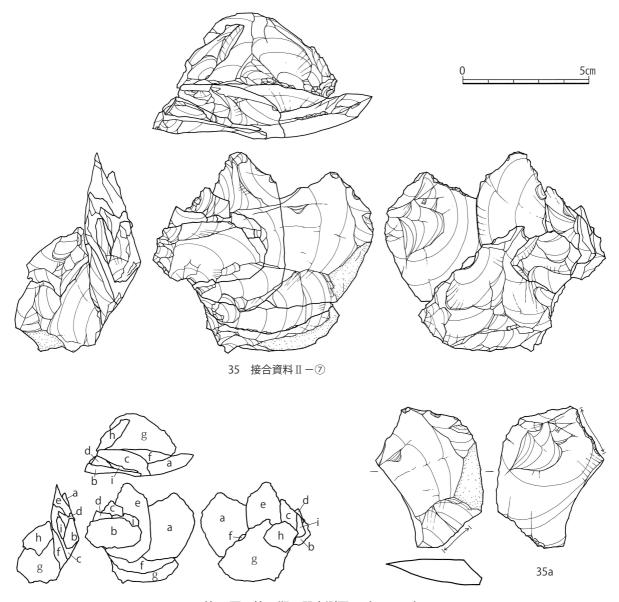


第32図 第 II 期石器実測図14 (S=2/3) 接合資料 II-⑥分布図 (S=1/250)

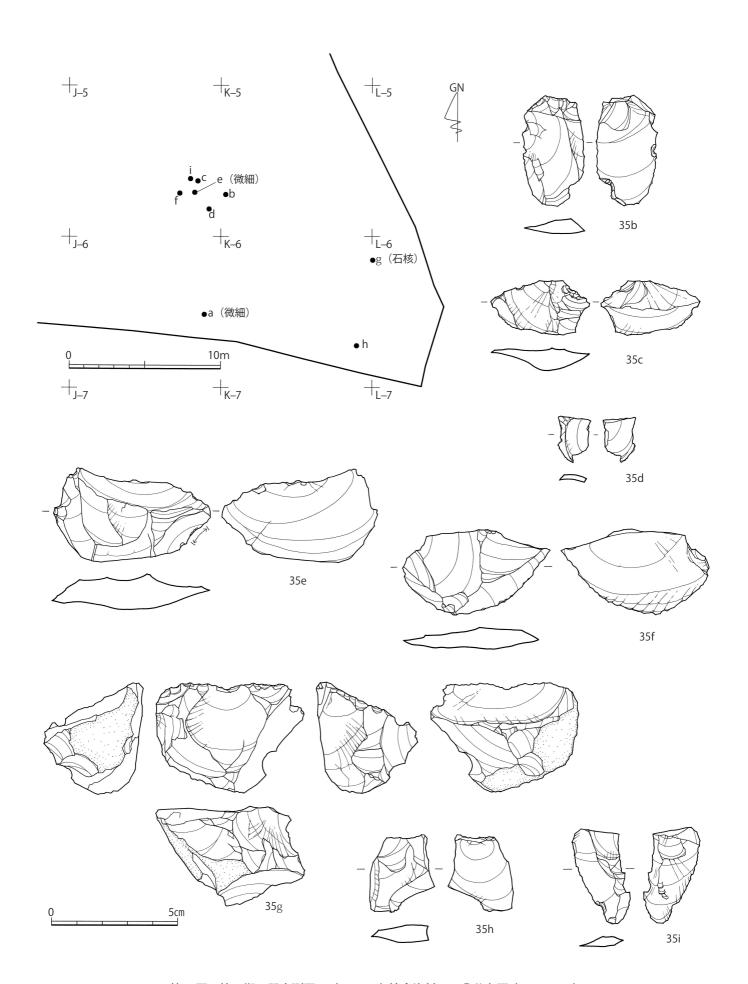
[接合資料34] (第31·32図)

[接合資料35] (第33・34図)

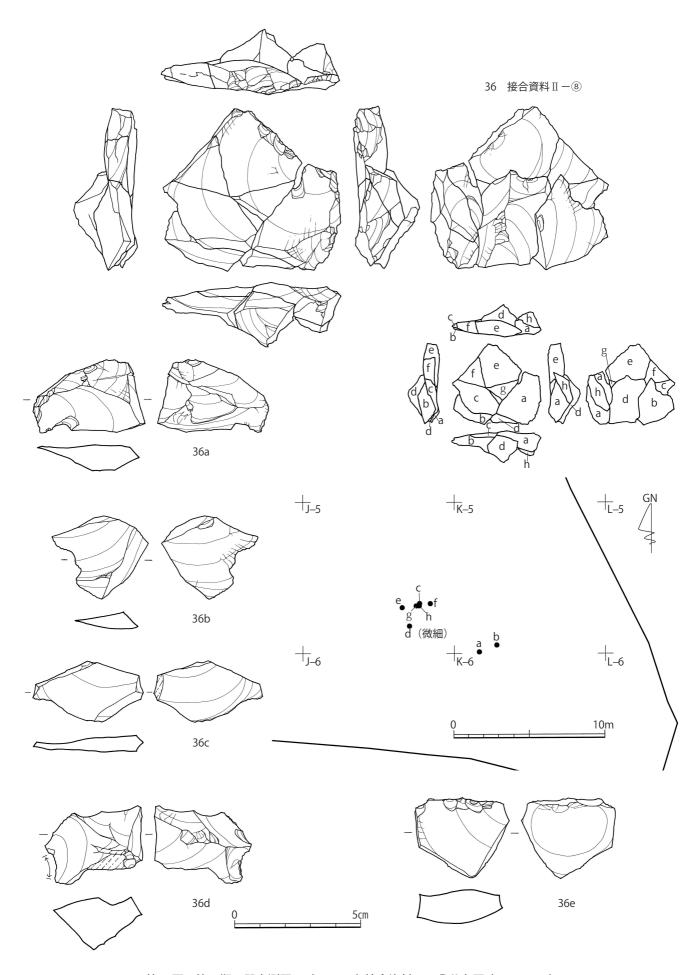
35接合資料 II -⑦は、R II 類製で微細剥離ある剥片 2 点、剥片 6 点、石核 1 点の合計 9 点が接合している。調査区南東部、J-5、K-6 グリッドで出土した。素材は砕片で、全体形が不明であるが、径10 m 以上の円礫だと考えられる。正面左側を打面に35bなどの剥離を行い、その後打面を直交させ正面上部から縦方向に35e、35aの剥離を行っている。さらに打面を直交させ35h、35fを剥離している。35aは右側縁下部に、35eは右側縁に微細剥離の見られる剥片である。35gは、35fなどの剥片を作出した後の自然面の残る石核である。



第33図 第Ⅲ期石器実測図15(S=2/3)



第34図 第 II 期石器実測図16 (S=2/3) 接合資料 II-⑦分布図 (S=1/250)

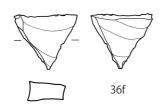


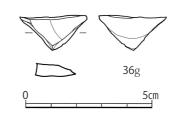
第35図 第 II 期石器実測図17 (S=2/3)接合資料 II-8分布図 (S=1/250)

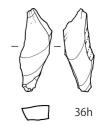
[接合資料36]

(第35・36図)

36接合資料Ⅱ-⑧は、RⅡ類製で微細剥離ある剥片1 点、剥片7点の合計 8点が接合してい

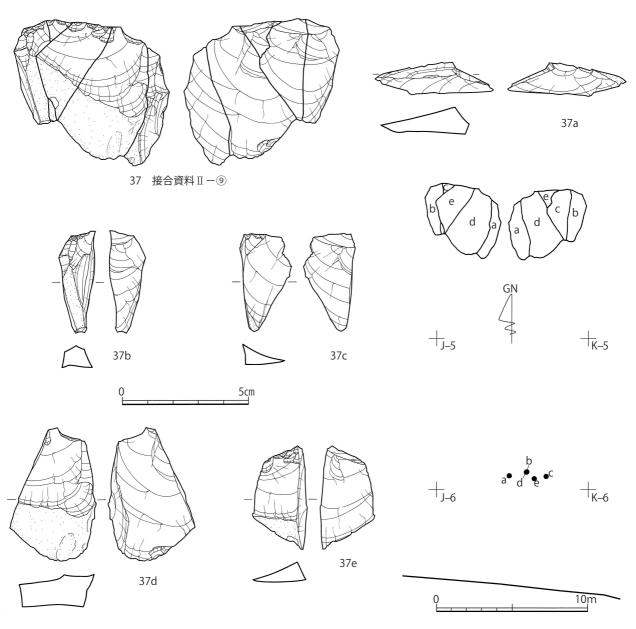




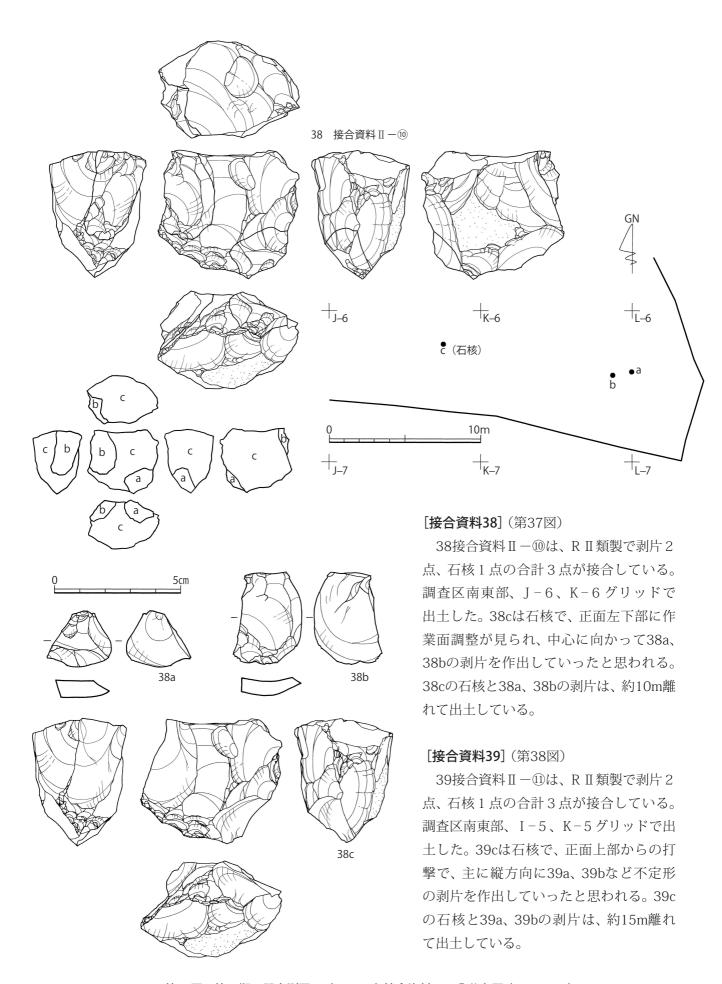


る。調査区南東部、J-5、K-5 グリッドで出土した。正面右上部を打面にし、36a、36e、36hの剥片を作出している。36c+36e+36f+36gはそれぞれ 1 枚の剥片であり、剥片剥離の衝撃で節理により偶発的に割れたものである。36dは、左側縁下部に微細剥離が見られる。

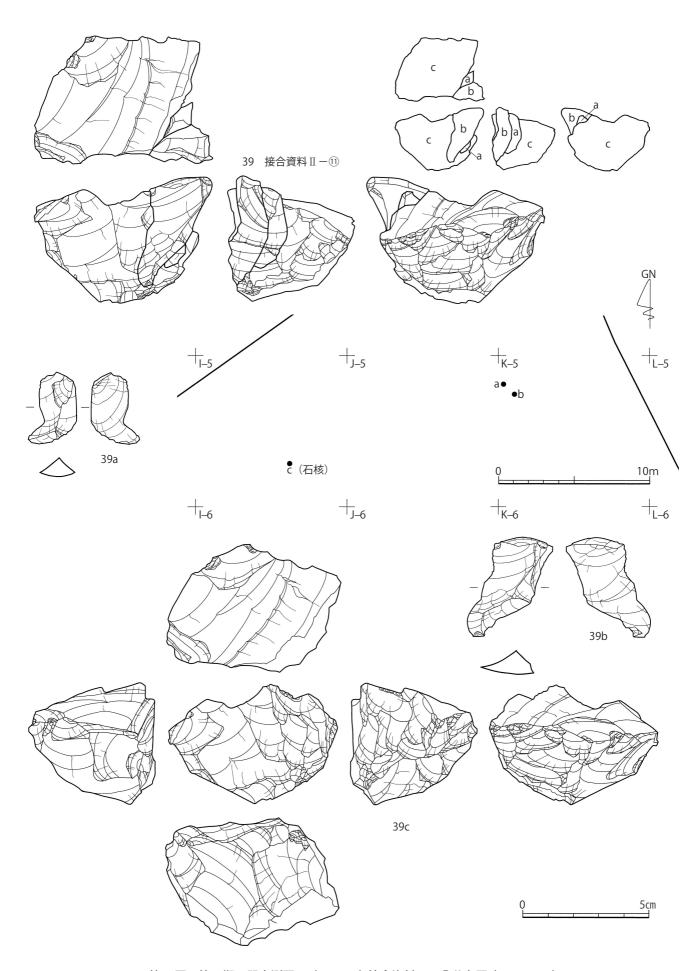
[接合資料37] (第36図)



第36図 第Ⅲ期石器実測図18 (S=2/3)接合資料Ⅲ-⑨分布図 (S=1/250)



第37図 第Ⅲ期石器実測図19(S=2/3)接合資料Ⅲ -⑩分布図(S=1/250)



第38図 第 II 期石器実測図20 (S=2/3) 接合資料 II-10 分布図 (S=1/250)

第3節 第Ⅲ期(Ⅶ~Ⅷ層)の調査(第39図~74図)

第Ⅲ期は、Ⅷ層下部~Ⅷ層の比較的層厚な箇所に遺構・遺物が分布している。Ⅷ層とⅧ層は色調の違う層であり、遺物の出土レベルにも幅がある。しかし以下の3点から、Ⅷ層とⅧ層を同一時期のものとして一括することとした。

- 大部分の接合資料でW層とW層が接合していること。
- ・ Ⅵ層とⅧ層の遺物分布図(第39図)から、遺物集中箇所が重複していること。
- 石材、器種構成に類似点が多いこと。

しかし、個々の集中箇所ごとに、石器の形態や剥離技術等の詳細な分析から、VII層とVII層を違う時期に分離できる可能性は否めない。

遺構は、礫群 4 基(第40図・41図)を検出した。調査区北側 J-4 グリッド、東側 K-6 グリッド周辺部分、西側 I-5 グリッドと I-6 グリッドの間付近の 3 箇所に遺物の集中区 (第41図) がある。

(1) 礫群(第40・41図)

第Ⅲ期から確認できた礫群は4基である。いずれの礫群にも、炭化物や掘込は確認されなかった。検 出面は、1号礫群(SI1)と2号礫群(SI2)はⅧ層上部、3号礫群(SI3)と4号礫群(SI4) はⅧ層中部であった。

1号礫群(SI1)はI-5グリッドで検出した。礫が7個使用されており総重量は1.55kgである。砂岩が4個、チャートが3個で、いずれも赤化している角礫が主体であった。

2号礫群(SI2)はK-6グリッドで検出した。礫が9個使用されており総重量は2.45kgである。砂岩が5個、流紋岩が3個、凝灰岩が1個で、砂岩と流紋岩は赤化しており、凝灰岩は赤化していなかった。角礫主体で、礫群中に石核(141g)が1点出土した。

3号礫群(SI3)はI-5グリッドで検出した。礫が18個使用されており総重量は2.45㎏である。砂岩が5個、流紋岩が9個、凝灰岩が4個で、いずれも赤化している円礫が主体であった。

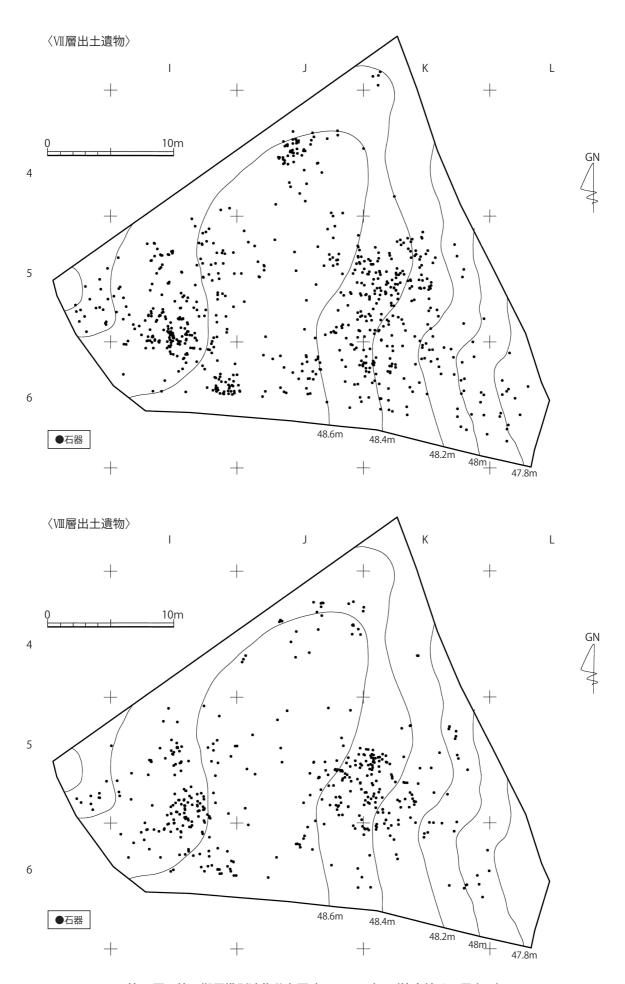
4号礫群(SI4)はJ-5グリッドで検出した。礫が67個使用されており、総重量は23.90kgである。砂岩が28個、ホルンフェルス9個、流紋岩28個、礫岩1個、凝灰岩1個で、いずれも赤化が激しい円礫主体で、被熱による破砕が大変顕著であった。

遺構番号	グリッド	検出面	長径 (cm)	短径 (cm)	掘込	石 材	礫数 (個)	重量 (kg)	礫の 密度	炭化物	備考
S I 1	J-5	8層上部	93	51	無	砂岩57%/チャート 43%	7	1.55	疎	無	全て赤化礫。角礫が主体。
S I 2	K-6	8層上部	94	51	無	砂岩56%/流紋岩33 %/凝灰岩11%	9	2.45	疎	無	凝灰岩以外は赤化礫。 角礫主体で構成。石核 (141g) が1点出土。
S I 3	I-5	8層中部	114	69	無	砂岩28%/流紋岩50 %/凝灰岩22%	18	2.45	疎	無	全て赤化礫。円礫が主体。
S I 4	J 5	8層中部	138	108	無	砂岩42%/ホルン14 %/流紋岩42%/礫 岩1%/凝灰岩1%	67	23.90	やや密	無	全て赤化が激しい円礫 主体で、被熱による破 砕が大変顕著。

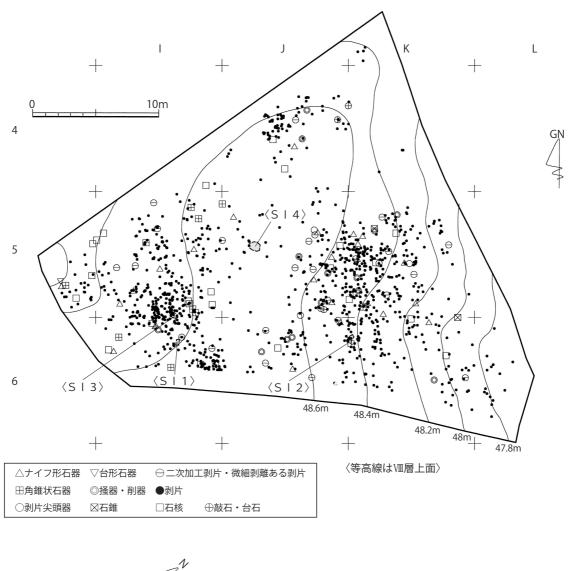
第4表 第Ⅲ期礫群計測表

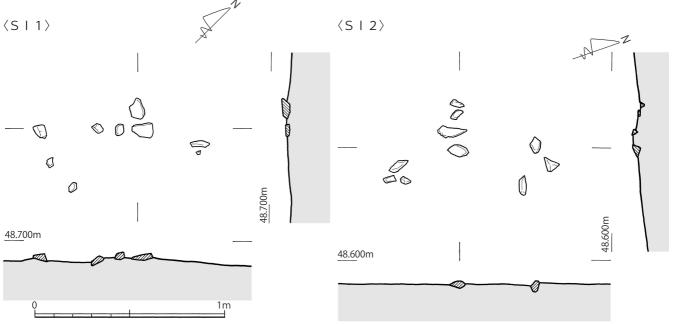
(2) 出土石器 (第42~56図-40~135)

第Ⅲ期の石器は、調査区北側 J-4 グリッド、東側 K-6 グリッド周辺部分、西側 I-5 グリッドと I-6 グリッドの間付近の3つの集中区から主に出土し、合計1056点を確認した。その内訳は、ナイフ形石

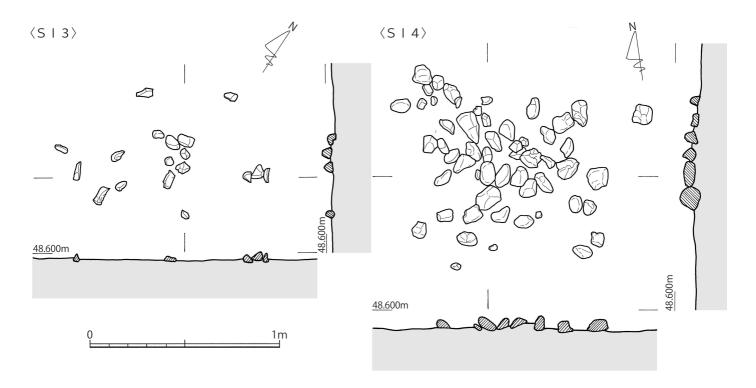


第39図 第Ⅲ期層準別遺物分布図(S=1/300) 〈等高線はⅧ層上面〉





第40図 第Ⅲ期検出状況図(S=1/300)第Ⅲ期礫群実測図1(S=1/20)



第41図 第Ⅲ期礫群実測図 2 (S=1/20)

器24点、角錐状石器 9点、剥片尖頭器 6点、台形石器 1点、削器・掻器13点、石錐 2点、二次加工剥片 8点、微細剥離ある剥片11点、剥片・砕片952点、石核27点、磨石 1点、敲石 1点、台石 1点である。石材は流紋岩 (特に R II 類)を中心としている。

 $40 \sim 63$ はナイフ形石器である。 $40 \sim 43$ は縦長な剥片を素材とした一側縁及び基部に加工を施している。いずれも R II 類製である。 $44 \sim 46$ は横長な剥片を素材とした一側縁加工で、46は R II 類製である。 $47 \sim 52$ は縦長な剥片を素材とした切出し形ナイフ形石器で、 $47 \sim 50$ は一側縁、 $51 \cdot 52$ は二側縁の加工を施している。 $47 \sim 49$ が R I 類製、 $50 \sim 52$ は R II 類製である。53は両側縁に加工を施し刃部を斜めに作出している。R I 類製である。 $54 \cdot 55$ はノの字形の斜軸剥片を素材としたナイフ形石器で、R II 類製である。 $56 \sim 63$ は二側縁に加工を施している。 $56 \sim 58$ 、 $60 \sim 62$ は細身な形をしている。59は、切出し形である。63は左側縁から基部にかけて見られる調整は抉りの入る急斜度の調整である。56は h o 製、 $57 \sim 60$ は R I 類製、 $61 \sim 63$ は R II 類製である。

 $64 \sim 72$ は角錐状石器である。 $64 \cdot 66$ は横長な剥片、 $65 \cdot 67 \sim 72$ は縦長な剥片を素材としている。65、66、67、69、72は表面に加工を施していない面が見られる。 $66 \sim 68$ 、 $70 \sim 72$ は稜からの加工が見られる。70は表面左右両側縁及び稜上から粗い加工を施した後、細かな調整を加えており、両面ともに加工が施されている。 $64 \sim 67$ は R I 類製、 $68 \sim 71$ は R II 類製、72は h o 製である。

73~78は剥片尖頭器である。いずれも縦長な剥片を素材としている。73は基部のみに抉入状の加工が施されている。74は中央の稜に微細な加工が見られる。76・77は、一側縁の基部からその周辺部までと、もう一側縁の全体に加工が施されている。73は R I 類製、74~76は R II 類製、77は R III 類製、78は R IV 類製である。

79は台形石器である。幅広な剥片を素材として、両側縁を八の字状の曲線に加工を施している。R I 類製である。

80・81は掻器で、どちらもRI類製である。80は縦長な剥片を素材として左側縁下部に加工が施されている。81は幅広な剥片を素材として、表面に自然面を残し、背面側からの連続した加工を施した大型の円形掻器である。

82~92は削器である。83・89は幅広な剥片、82・84~88、90~92は、縦長な剥片を素材としている。89は主要剥離面から連続的な加工を施し、刃部を形成している。86は剥片尖頭器素材に近似した縦形削器で、左側縁に加工が施されている。また刃部とは別に左側縁に微細な剥離が見られる。88は表・裏両面側からの加工が施されており、ナイフ形石器からの転用も考えられる。82~86はRI類製、87・88はRI類製、89はRII類製、90~92はRIV類製である。

93・94は石錐である。93は、縦長な剥片素材の打点側を除去して、先端部を断面三角形になるよう加工を施している。RⅡ類製である。94はRⅢ類製である。

95~100は二次加工剥片である。95は縦長な剥片を素材として、表面両側縁からの加工を施している。97は横長な剥片を素材としており、稜からの加工が見られ、角錐状石器とも考えられる。96・100は縦長な剥片を素材としており、96は正面上部両側縁に、100は正面上部左側縁に抉りの入る加工が見られる。95・96は R I 類製、97・98は R II 類製、99はチャート製、100は h o 製である。

 $101 \sim 109$ は微細剥離ある剥片である。 $101 \cdot 103 \sim 109$ は一側縁に、102は両側縁に微細な剥離が見られる。 $101 \sim 103$ はR I 類製、 $104 \sim 106$ はR II 類製、 $107 \sim 109$ はR IV 類製である。

 $110 \sim 128$ は剥片である。 $110 \sim 113$ は横長な剥片である。 $114 \sim 128$ は縦長な剥片である。124は、正面上部に若干の抉りが見られる。 $110 \cdot 114 \sim 119$ は R I 類製、 $111 \sim 113$ 、 $120 \sim 126$ は R II 類製、127は R II 類製、128は h o 製である。

 $129 \sim 132$ は石核である。130は自然面側を打面にして縁辺にそって移動しながら剥離を行っている。 $129 \sim 131$ はRI類製、132はRIV類製である。

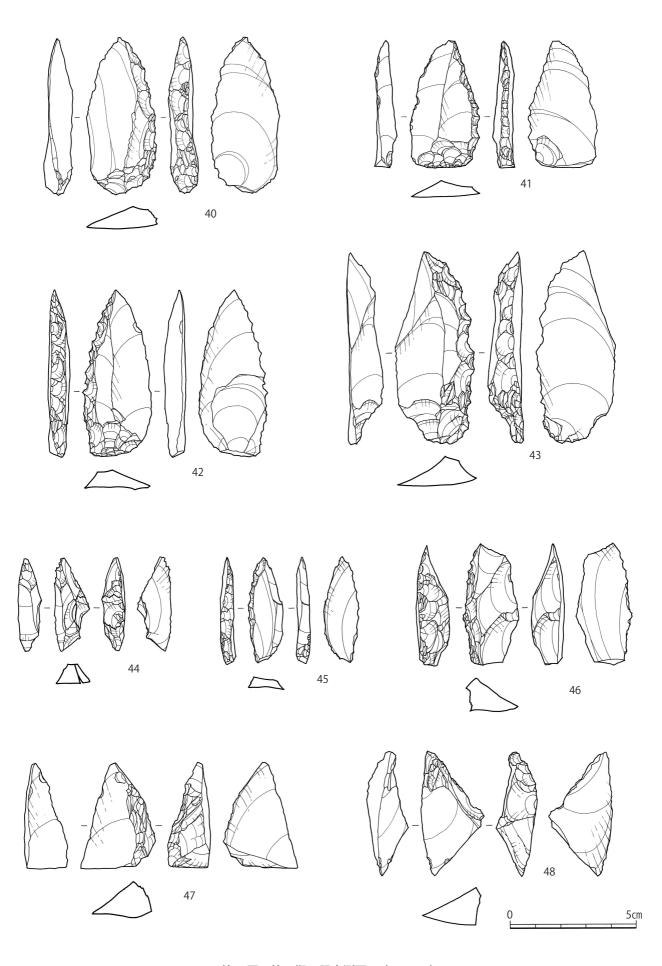
133は敲石である。両端部に敲打痕が見られる。チャート製である。

134は磨石である。左右側面に磨面が見られる。砂岩製である。

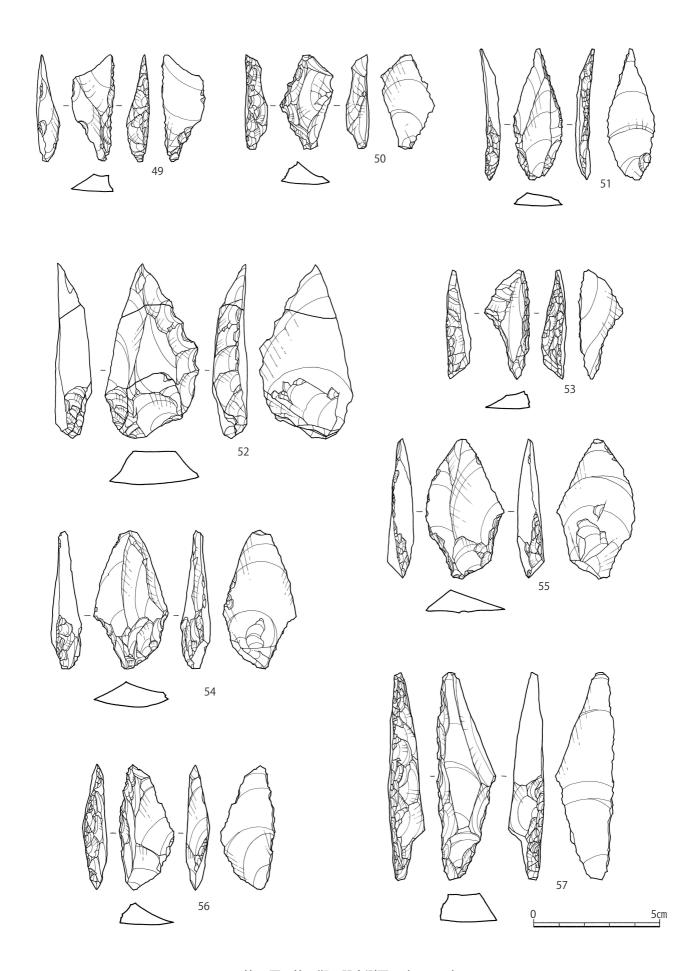
135は台石で、h o 製である。

	流紋岩			ホルンチャート	砂岩	凝灰岩	花崗斑岩	黒曜石	合 計		
	I類	Ⅱ類	Ⅲ類	IV類	フェルス	テャート	100 石	规火石	化崗斑石	赤曜 石	
ナイフ形石器	8	14	1	0	1	0	0	0	0	0	24
角錐状石器	4	4	0	0	1	0	0	0	0	0	9
剥片尖頭器	1	3	1	1	0	0	0	0	0	0	6
台 形 石 器	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
削器•掻器	7	2	1	3	0	0	0	0	0	0	13
石 錐	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2
二次加工剥片	2	3	0	0	1	1	1	0	0	0	8
微細剥離ある剥片	3	5	0	3	0	0	0	0	0	0	11
剥片•碎片	406	410	49	20	44	23	0	0	0	0	952
石 核	8	16	0	2	0	1	0	0	0	0	27
磨石 • 敲石	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2
台 石	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
合 計	440	458	53	29	48	26	2	0	0	0	1056

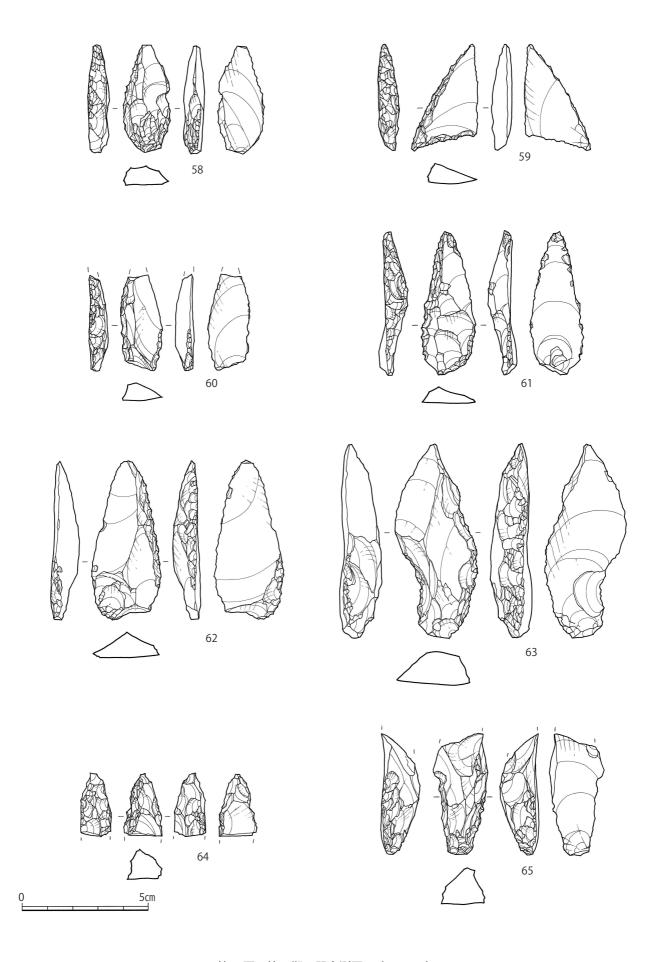
第5表 第Ⅲ期出土石器石材別組成表



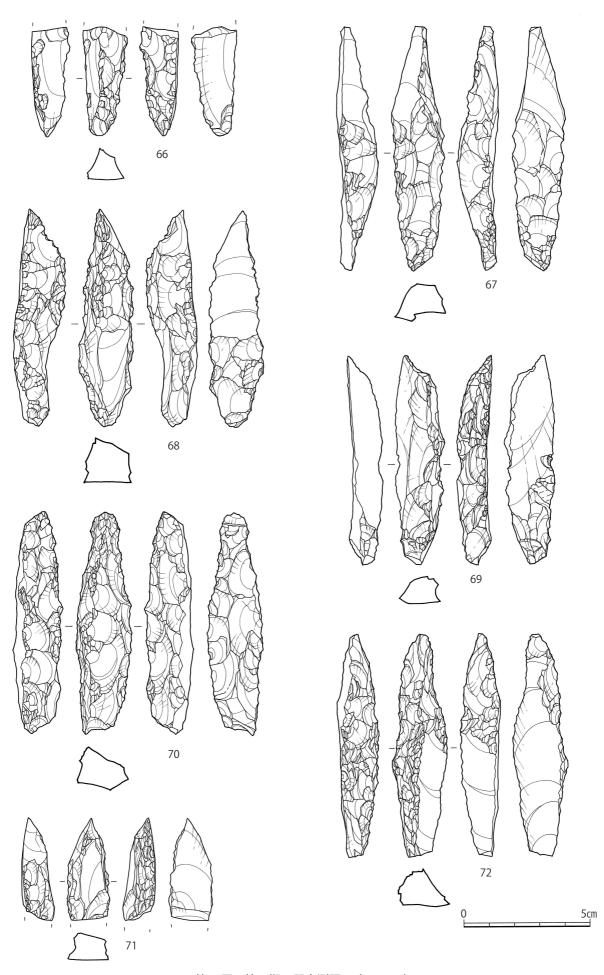
第42図 第Ⅲ期石器実測図1(S=2/3)



第43図 第Ⅲ期石器実測図 2 (S=2/3)



第44図 第Ⅲ期石器実測図3(S=2/3)



第45図 第Ⅲ期石器実測図4(S=2/3)